長岡京市文化財調査報告書　第54冊

恵解山古墳

―第９次調査概報―

2009

長岡京市教育委員会

編集　財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

はじめに

乙訓地域最大の前方後円墳である恵解山古墳は、前方部から700点以上の鉄製武器類などを納めた副葬品埋納施設が発見されたことから、昭和56年に国史跡に指定されました。

長岡京市では、この優れた文化遺産を将来にわたって守り伝えるとともに、市民に広く開放し活用を図るため、平成15年度に保存整備・活用の基本構想を、平成17年度には指針となる基本計画を策定しました。そして現在は、学識経験者・市民公募委員で構成された保存・整備委員会において、具体的な検討を行っているところです。また、「恵解山古墳を愛する人」に登録された市民を中心に、恵解山古墳ワークショップや古墳見学会、コスモス栽培などの事業を開催することで、市民との協働を実践するとともに保存整備後の活用などにおける「市民参加」の方法を模索しています。

さて、本書には平成20年度国庫補助事業として実施した恵解山古墳第９次調査の成果をまとめました。調査では後円部の北側と東側くびれ部付近で第１段平坦面の埴輪列が発見されるなど、古墳の復元整備を行う上で大きな成果を収めることができました。また、築造当初の恵解山古墳の姿が次第に明らかとなることで、皆様の古墳に対する理解や愛着が深まるものと考えています。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご協力をいただきました近隣の皆様方、貴重なご指導をいただきました諸先生方、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成21年３月

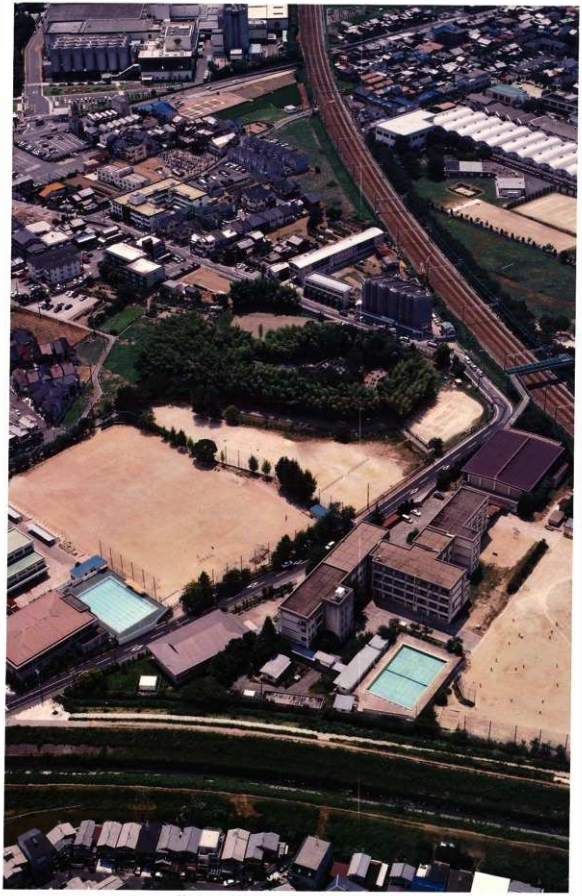
長岡京市教育委員会
教育長　芦　田　富　男

例　言

1．本書は、平成20年度に国庫補助事業として実施した恵解山古墳第９次（長岡京跡右京第959次）調査の概要報告である。
2．発掘調査は、平成20年12月１日から平成21年３月31日まで行った。調査面積は、合計277㎡である。
3．調査は、長岡京市教育委員会から委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。
4．表紙の写真は、９－４調査区検出の葺石と円筒埴輪列である。
5．本書の執筆、編集は埋蔵文化財センター木村泰彦が行った。

目　次

1　位置と環境 ―――― 3
2　調査経過 ―――― 4
3　第９次調査の成果 ―― 7
　９－１調査区 ―――― 7
　９－２調査区 ―――― 8
　９－３調査区 ―――― 9
　９－４調査区 ―――― 10
　９－５調査区 ―――― 12
　出土遺物 ―――― 13
4　まとめ ―――― 14



第１図　恵解山古墳全景（北東から）

1　位置と環境

恵解山古墳はＪＲ長岡京駅の南約１km、ＪＲ京都線の線路の東に位置する京都府下でも有数の前方後円墳である。地形的には西山丘陵から南東方向に向かって伸びる低位段丘の縁辺部に位置しており、桂川、宇治川、木津川の三川合流地点に近く、西側は後世に古代山陽道や西国街道が通るなど交通の要衝地が選ばれていることが分かる。これまでに行われた調査によって、古墳の全長は約128mに復原されており、大量の鉄製武器類が出土したことや上述した立地などから、古墳時代中期（５世紀前半）の乙訓地域の盟主墳にふさわしい威容をそなえていたと推定される。

周辺の調査では、周壕南東部の右京第37次調査で17×14mの方墳（南栗ヶ塚古墳）が見つかっており、また周壕南西部に接する右京第812次調査では形象埴輪片が出土するなど周辺にも古墳が存在したことが知られている。また恵解山古墳は長岡京期には八条条間小路と西一坊大路の交差点に当たっており、周壕内からは長岡京期の遺物が多く出土していることから、墳丘は破壊されていないものの周辺での土地利用がなされていたことが判明している。さらに平安時代に入ると恵解山古墳のすぐ南西部付近に、第３次山城国府が移転した可能性が指摘されており、周壕内や周辺からは多くの平安時代の遺物が出土している。特に右京第812次調査では、乙訓地域では最大量の緑釉陶器片が出土しており、このことから山城国府内の重要な施設が恵解山古墳の周壕に接して存在していたものと推定される。

第２図　恵解山古墳の位置（1/5000）

2　調査経過

恵解山古墳に対して考古学的な調査が行われたのは、大正13年（1924）の梅原末治氏による踏査が最初である。この踏査では現状観察から墳形と規模、葺石と埴輪を伴うことが紹介されるとともに、以前に掘り出されたと伝えられる石材から、後円部主体部は竪穴式石槨と推定されている。その後昭和42年（1967）の京都府教育委員会による初めての墳丘測量図作成を経て、恵解山古墳で本格的な発掘調査が行われるのは昭和50年（1975）まで待たねばならない。この調査は恵解山古墳西側の市道施設に伴って行われたもので、周壕外周部分のトレンチ調査である（第１次）。翌昭和51年（1971）には恵解山古墳の北東周壕部で中学校のグランド造成工事が行われることとなり、それに伴う調査によって後円部と前方部で葺石の裾部が確認されて、初めて墳丘復原のための基礎的なデータが得られた。さらに昭和55年（1980）に墓地造成工事に伴って行われた第３次調査では、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、蕨手刀子などの大量の鉄製武器類が発見され、前方部中央付近に副葬品の埋納施設をもつことが明らかになるとともに、西側くびれ部では極めて遺存状況の良好な葺石の存在が確認された。これらの成果を受け、関係諸氏、諸機関の努力によって、翌年の昭和56年（1981）に国指定史跡として保存されることが決定した。

恵解山古墳の調査一覧表

調査次数	長岡京跡調査次数	調査期間	調査面積	調査主体	調査の内容	文献
		1924年		京都府	梅原末次氏による古墳の踏査。 墳形と規模、葺石と埴輪を伴うこと、埋葬施設が竪穴式石室であることなどを紹介。	京都府史蹟勝地調査会報告第６冊（1925年）
		1967年		京都府教育委員会	分布調査に伴う墳丘の測量。	埋蔵文化財発掘調査概報 1968（1968年）
第１次		1975年3月10日 ～1975年3月19日		長岡京市教育委員会	市道敷設工事に伴う調査。	長岡京市文化財調査報告書第２冊（1976年）
第２次		1976年11月26日 ～1977年1月11日		長岡京市教育委員会	中学校グランド造成工事に伴う調査。 後円部および前方部の基底付近の葺石を確認。	長岡京市文化財調査報告書第３冊（1977年）
第３次		1980年4月15日 ～1980年7月15日	313㎡	長岡京市教育委員会	墓地拡張工事に伴う調査。 前方部中央の副葬品埋納施設、墳丘西側くびれ部の葺石を確認。 埋納施設から、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、蕨手刀子などの鉄製品が大量に出土した他、管玉や碧玉片岩、安山岩なども出土。	長岡京市文化財調査報告書第８冊（1980年）
第４次	右京第783次	2003年8月11日 ～2003年11月10日	179㎡	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	範囲確認調査。 前方部前面の葺石、周壕を確認し、前方部幅が大きくなることが判明。	長岡京市文化財調査報告書第46冊（2004年）
第５次	右京第827次	2004年9月1日 ～2004年10月28日	218㎡	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	範囲確認調査。 前方部西側面の埴輪列と造り出しの存在が新たに確認されたとともに、前方部南西隅を検出。	長岡京市文化財調査報告書第47冊（2005年）
第６次	右京第859次	2005年9月20日 ～2005年11月9日	142㎡	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	範囲確認調査。 墳丘西側のくびれ部と造り出し、後円部の葺石などを確認。造り出しの規模が判明。	長岡京市文化財調査報告書第48冊（2006年）
第７次	右京第893次	2006年12月1日 ～2007年3月5日	231㎡	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	保存整備に伴う調査。 前方部東側面の葺石と平坦面、西側裾部の葺石などを確認。	長岡京市文化財調査報告書第50冊（2007年）
第８次	右京第920次	2007年11月1日 ～2008年2月29日	272㎡	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	保存整備に伴う調査。 墳丘西側くびれ部の葺石、前方部東側面の埴輪列、後円部西側の葺石などを確認。斧、鏃先、刀子などの鉄製品が出土し、前方部に新たな埋納施設存在の可能性。	長岡京市文化財調査報告書第52冊（2008年）

史跡指定用地の購入が完了した平成15年（2003）以降は、保存整備のための基礎データを得るための調査が行われることとなった。第４次調査では初めて前方部の調査が行われ、幅がこれまでの推定よりも広くなることが判明した。平成16年（2004）の第５次調査では前方部南西隅が確認されるとともに、西側に造り出しが存在することが判明し、前方部西側面では第２段埴輪列が検出されるなどの多くの成果が得られている。平成17年（2005）の第６次調査では西側くびれ部と造り出し北側を検出し、西側造り出しの規模が判明した。平成18年（2006）の第７次調査からは、保存整備に向けて前方部を中心に５つ調査区を設定。東側面の葺石と平坦面、および西側裾部の葺石を確認している。平成19年（2007）の第８次調査では、墳丘西側くびれ部の葺石が検出され、第３次調査で検出された葺石の延長部が確認された。また後円部西側裾部の葺石も見つかっている。さらに前方部東側面では第２段埴輪列が出土し、第５次調査の埴輪列の成果と合わせ、前方部復原のための貴重なデータが得られた。さらに斧、鋤先、刀子等の鉄製品が出土したことにより、前方部に鉄製武器以外を納めた新たな埋納施設の存在が推定されるに至った。

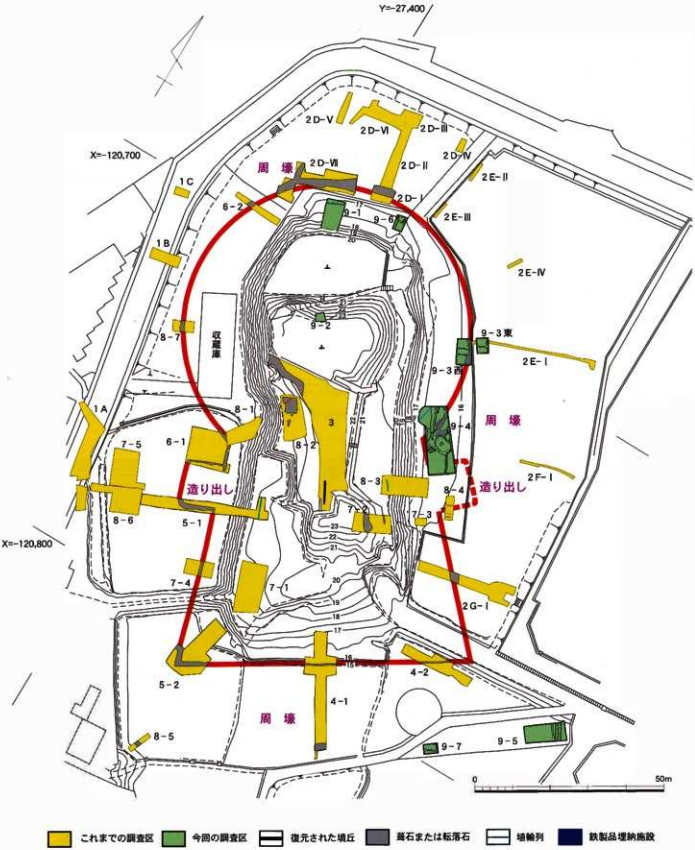
このように毎年新たな発見がなされ、保存整備のための貴重なデータが蓄積されている。本年度の調査では、後円部の正確な規模を把握するために、後円部の北側に９-１調査区、東側に９-３調査区を設けた。また中心埋葬施設の手がかりを得るために、後円部中心付近の斜面には９-２調査区を設定。そのほかに墳丘東側のくびれ部と東側造り出しの検出を目指して９-４調査区を、前方部南側周壕外周の確認のために周壕南東部に９-５調査区を設けた。その後、調査の進展に伴って新たに９-１調査区の東に９-６調査区、９-５調査区の西側に９-７調査区を設けた。

第３図　９-１調査区調査前風景（東から）

第４図　９-２調査区調査前風景（北から）

第５図　９-３・４調査区調査前風景（南東から）

第６図　９-５調査区調査前風景（南西から）



第7図　恵解山古墳の調査地位置図（1/1000）

3　第９次調査の成果

９－１調査区

当調査区は、古墳の推定中軸線上に当たる後円部北側に設置したものである。すぐ北の第２次調査では、後円部裾と大量の葺石が広範囲に検出されており、当調査区では第１段テラス、埴輪列、第２段墳丘斜面と葺石の検出を目的として南北8m、東西5mで設定した。現地表下約0.2mで黄色粘土、黒色粘土、茶褐色砂質土からなる盛土層に至り、調査区北端の斜面部分で第１段埴輪列を検出することができた。いずれも円筒埴輪で、北側を削平されているものの調査区内全面で検出され、ほとんど失われたものを含めて14個体分が確認できている。上部は削平のためいずれも底部のみで、最も残りの良いものでも高さは約10cmほどしかない。直径は20～23cmで円筒埴輪同士の間隔は10～15cmとかなり密接して並べられている。埴輪は幅約0.4m、深さ約0.1mの布掘りされた溝に設置される。第２次調査では転落した葺石が幅広く検出されているため、北側の墳丘裾部は特定が困難であるが、今回検出された埴輪列との距離は概ね約4～6mである。

また今回の調査では、調査区を設定した平坦部がすべて後世の盛土であることが新たに判明した。盛土は埴輪列や墳丘、葺石などを削平した後に、厚さ約１～1.5mにわたり灰色粘土、黄色粘土、黒色粘土、茶褐色砂質土を交互に堅く突き固めている。盛土の状況から、調査区南の一段高い墓地の北側崖面も同様の盛土であり、大規模な造成が行われていたことが明らかとなった。ただし盛土内からは、遺物の出土が無く、その時期や目的などについては今後検討を要する。

第８図　9-1調査区埴輪列と盛土の状況（北西から）

これらの成果をもとに、埴輪列東側延長部の検出と、後世の整地の広がりを確認するために9-1調査区の東15mに新たに南北4m、東西2.5mの9-6調査区を設けた。調査の結果、当調査区内では江戸時代以降の削平により、埴輪列、後世の整地土ともに検出されなかったが、下層ではわずかに古墳の盛土が確認された。また藪土の堆積から多数の結晶片岩が出土している。

9－2調査区

当調査区は、恵解山古墳の主体部に関する手がかりを得るために、後円部のほぼ中央付近に設定したものである。恵解山古墳の主体部については、大正13年（1924）の踏査の段階で凝灰岩の板石が5枚出土したことが記されており、これらが竪穴式石槨の天井石と推定されている。その後恵解山古墳第2～4次、6～8次の各調査では結晶片岩が多数出土しており、おそらく竪穴式石槨の壁体に使用された物と考えられている。また恵解山古墳第6次調査では、地中探査レーダーにより、後円部中央付近で古墳の主軸に直行する東西約10m、南北約5m長方形の落ち込みが存在する事が判明した。今回の調査区はこの長方形の落ち込みの北側約3mにあたる墓地内の道に面した崖面に当たる。調査区は崖面に生えている木の間に南北2.3m、東西2.5mで設定した。表面から約0.5mには腐植土の堆積があり、さらにその下には南側からの堆積土と見られる黄褐色砂質土が約0.3m堆積していた。この堆積土内からは土師器の皿が出土している。これらを除去すると墳丘を構成する盛土の一部と見られる比較的堅く締まった灰白色砂礫土が確認された。直上に墓地があるためこれ以上掘り進むことはできなかったが、観察では竪穴式石槨や粘土槨に関連するような土層・土質の明確な変化や石材、遺物などは確認する事はできなかった。

第9図　9-2調査区全景（北西から）

9－3調査区

当調査区は、後円部の正確な規模を把握する目的で、後円部東側に設定したものである。調査区設定予定個所にはちょうど中学校のグランドと恵解山古墳を隔てるフェンスが存在するため、それを境として古墳側に南北7m、東西4mの西調査区、中学校グランド側に南北4m、東西3mの東調査区を設けて調査を行った。

西調査区では地表下1～1.2mまでは整地用盛土と西側からの近世堆積土で、その下に江戸時代の遺物を含んだ厚さ約0.1m水田耕作土があり、それを除去すると地山面および葺石と埴輪片が検出された。葺石・埴輪はほぼ後円部裾推定線に沿って調査区東辺で検出されており、葺石はいずれも拳大の小形の石で、出土状況もまばらで、大形の石が並ぶような状況も看取されないため、すべて転落したものと見られる。葺石の上面には同様に転落した埴輪が比較的まとまって出土しており、いずれも円筒埴輪である。この他に転落した葺石に挟まれるような状態で長岡京期の須恵器杯Bも出土している。調査区の南東隅では、葺石の下に灰色の粘質土と黒色粘土層が確認される。

第10図　9-3西調査区全景（北から）

東調査区では、0.8mの中学校グランド整地土の下に約0.2mの水田耕作関連の堆積層があり、さらにその下に周濠内の堆積層である約0.4～0.5m礫を含んだ灰色粘土層が存在する。それらを除去すると灰オリーブ色シルトと明赤褐色礫からなる地山に至る。周濠堆積土はほとんど遺物を含まず、また葺石の転落状況も確認できなかった。これらのことから後円部裾はフェンス下付近に存在するものと見られる。この他に水田面からは直径0.7mの円形素掘井戸が掘り込まれていた。

第11図　9-3調査区全景（東から）

9－4調査区

当調査区は、恵解山古墳の東側くびれ部の検出と東側造り出しの有無を確認するために設定したものである。これまでの推定復原案をもとに、南北18m、東西7mで調査区を設けた。調査の結果、ほぼ推定どおりに後円部南東側の裾部と葺石を検出した。また調査区北西部側では後円部第1段埴輪列も検出され、これに伴って西側に約1.5m拡張を行っている。

調査区内では、現地表下約1～1.2mまで近世以降の堆積土が続いており、それらを除去すると、灰色粘土の水田耕作土があらわれる。また調査区の北西隅には削平されずに残った後円部墳丘が高さ約1mの高さで残存しており、その崖面に沿って幅約1m、深さ約0.3mの溝と、その東に幅0.5～0.7m、高さ0.4mの断面半円形に盛り上げられた畦が作られている。溝内には砂の薄い堆積が見られることから水路と見られる。溝の南側には直径3.5m以上の井戸と見られる大きな落ち込みがあり、一連の施設と考えられる。昭和42年（1967）の京都府教育委員会作成の墳丘測量図ではこの部分では大きく墳丘をえぐられるように等高線が巡っており、かなり大規模な落ち込みが存在した可能性がある。これより東側が水田面となるが、この耕作土と床土を除去すると調査区の北と南では地山面となり、中央付近では灰色粘土層と転落した葺石が現れる。南側ではこの地山面を切り込む形で幅0.5m、深さ0.2mの蛇行する溝が、中央付近には水溜と井戸が検出された。いずれも江戸時代の遺物を含み、水田より以前のものである。水溜は直径1.6m、深さ0.8mの堀方内に直径1.3mの曲げ物の枠を納めたもので周囲は灰色粘土で埋めている。井戸は直径約0.8mの底を抜いた桶を倒立させて井戸枠としたもので、上部1段目まで確認している。この井戸の堀方は非

第12図　9-4調査区全景（北から）

常に大きく南北約５m、東西約３mの楕円形を呈し、このため前方部と東側造り出し裾部は大きく破壊されていた。江戸時代の撹乱および灰色シルト、暗灰色粘土の堆積を除去すると、後円部東側の葺石が検出される。周壕は深さ0.3～0.4mと浅く、底部には部分的に密集して直径５cm前後の細かい石が張り付いている。葺石は斜面中段付近に比較的大きな大きな石が並びこれが基底石と考えられる。石は転落したものと現位置を保つものとの区別が困難であるが、概ね幅0.5～1.5mで残っている。東側造り出しは近世井戸の撹乱により正確な形状は不明な部分が多いが、対称位置より一回り大きいようである。西半は地山を削りだしているが東半部は黒色粘土と灰白色粘土を積み上げて成形しており、これは部分的に周壕底部にも及んでいる。遺物は非常に少量で、円筒埴輪を中心に現段階では蓋形、叡形、盾形などの形象埴輪片なども確認される。いずれも小片で、他に長岡京期の遺物が周壕底部から出土している。

北西部の墳丘はかなり削平を受けており、灰白色の地山の上に厚さ約0.4mの旧表土である黒色土があり、その上の盛土は西側にわずかに残るのみであった。この面でかろうじて後円部１段目の埴輪列が残っていた。削平されたものを含めて14個体分が確認できる。直径は確認できるものでは約20～24cmであるが、南から２番目の埴輪は直径27cmと一回り大きく、円筒埴輪とは異なる可能性もある。削平は南から北に向かって低くなっており、北側では３個分が完全に失われ、最も北側のものもわずかに底部片が残るのみである。南側の残りの良好なものでは高さ20cmほどあり、一段目突帯がかろうじて残るものがある。埴輪同士の間隔は約12～15cmで、これらは幅約0.4m、深さ0.1mの布掘りされた溝に設置されている。

第13図　葺石検出状況（南西から）

第14図　埴輪検出状況（南西から）

9－5調査区

当調査区は、恵解山古墳の南側周壕外周部の検出を目的として、周壕南東隅に南北5m、東西11mで設定した調査区である。調査の結果、耕作土・床土・中世遺物を包含する暗灰黄色粘質土を除去した段階で明黄褐色シルトの地山面にいたり、現地表下0.5mで東から西に向かって緩やかに傾斜する外周部を検出した。周壕は深さ約0.4mで、最上層は厚さ約0.2mの平安時代～長岡京期の遺物を包含する褐灰色粘土層でそれ以下、粘土、シルトの薄い堆積が続いている。地山は周壕部分では砂質土へと変化するが、直上には地山のシルトと黒色粘土が細かく混じった薄い堆積が見られ、人為的に敷かれた様相を呈している。これらの層は遺物をほとんど含んでいない。周壕外周部の東側には幅0.6～0.7m、深さ0.2mの溝が存在する。方向は外周部よりもわずかに南で西に振れていて、調査区南側で接している。埋土は周壕外周部の肩付近堆積しているものと同一で、南壁の観察でも切り合いは認められないことから、同時期に埋没した状況が看取される。これらの検出状況から南側の周壕外周部は推定よりもさらに南に広がることが明らかとなった。

この南側周壕外周部の状況を把握するため9-5調査区の西24mに、南北25m、東西4mの9-7調査区を新たに設定した。その結果南から北に向かって緩やかに傾斜する南側周壕外周部が検出され、外周部がわずかに南に広がって行く状況が確認された。深さは0.3mと非常に浅く、ベースは青灰色の砂質土である。全体に礫が目立つが、規模が小さく葺石とは思われない。また部分的に深くなった個所には黒色粘土が堆積し、その上面には直径2～5cmの小さな石が集積している。これらの直上からは長岡京期～鎌倉時代の遺物が出土している。

第15図　9-5調査区全景（東から）

出土遺物

今回の調査では多くの遺物が出土しているが、恵解山古墳に伴うものとしては、後円部２個所で確認された第１段埴輪列があげられる。完全に失われているものを除くと、９-１調査区では10個体、９-４調査区では11個体を確認している。いずれも底部のみの破片でかなり削平を受けており、一段目の突帯まで確認できるものは１個体に過ぎない。直径20～24cmで、外面はかなり摩滅しているが、遺存状況の良好な個体では、底部縦方向の１次調整ハケの後に横方向のハケメを施している。この他には９-４調査区の周壕内や江戸時代以降の堆積土内から円筒埴輪の他、蓋形、靫形、盾形などの形象埴輪片なども出土している。また９-３調査区でも葺石上に転落した状況で円筒埴輪片が多く出土している。９-６調査区では、埴輪列のものとは異なる大形の円筒埴輪片が出土している。この他には竪穴式石槨に使用されていたと考えられる結晶片岩の破片が９-１、９-３、９-４、９-６調査区で14個出土しており、９-６調査区では９個と特に多くみられる。

長岡京期の遺物は９-３、９-４、９-５、９-７調査区で周壕内から出土している。いずれも小片が多いが、９-４調査区のくびれ部付近や９-７調査区では周壕底部に張り付いた状況で出土するものもあり、長岡京期における恵解山古墳の状況を示す興味深い例である。

平安・鎌倉時代の遺物は９-５、９-７調査区の周壕堆積土内に集中しており、江戸時代の遺物は９-４調査区の江戸時代井戸、水田堆積土内から多く、９-６調査区では藪土内に多く含まれている。本調査では江戸時代の墓は検出されておらず、水田開墾時や竹藪開墾時に伴うものと考えられる。

第16図　出土遺物

4　まとめ

今回の恵解山古墳第９次調査においてもこれまで同様多くの成果を得ることができた。

まず後円部の第１段埴輪列が確認された点があげられる。埴輪列は９-１調査区と９-４調査区においてそれぞれ確認されており、かなり削平を受けているものの、布掘りされた溝に円筒埴輪が密集して立て並べられた状況が明確に観察された。埴輪列はこれまで前方部の東西で第２段のものが確認されており、埴輪の大きさや埋設状況はほぼ同じであり、今回新たに後円部の第１段が検出されたことにより、埴輪列復原のための貴重な成果となった。

ついで９-４調査区において後円部葺石裾部が検出され、墳丘復原のための貴重なデータが得られたことがあげられる。残念ながらくびれ部は近世の井戸によって破壊され正確な場所は不明であるが、西側の状況と合わせ復原のための重要な成果といえよう。また東側にも造り出しが存在することが確実となり、恵解山古墳は東西に造り出しを持つ前方後円墳であることが判明した。東側造り出しは、これも残念ながら近世の井戸による攪乱を受けていたため正確な規模・形状は不明であるが、西側の造り出しよりも若干大きくなる可能性がある。また部分的に盛土によって成形されていることも判明している。この盛土は東側では周壕底部にも認められ、９-４調査区北西隅で確認された地山と旧表土面と合わせ、古墳の構築状況を知ることができる成果である。

９-５調査区では当初の予想とは異なり、南北方向に東側周壕外周部肩が検出された。このことから９-７調査区の成果と合わせ、南側の周壕外周部は南東部で緩やかに南に広がることが判明した。また９-５調査区は肩部付近に小礫の堆積が見られない点が９-７調査区を含むこれまでに確認されている外周部とは異なっている。さらに地山と粘土を混ぜた層を底部に敷き詰めているのが確認されたのも新たな発見といえるであろう。

上記のほかに後世の恵解山の土地利用の一端が明らかとなったことがあげられよう。長岡京期に恵解山古墳は大路と小路の交差点に位置しており、破壊されずに残されたことからこれまで造営進捗状況の指標とされてきた。ただ周壕内から長岡京期の遺物が多く出土することは以前から判明しており、周辺に長岡京期の施設が存在した可能性は高く、別の観点からの考察も必要であろう。これは後の推定第３次山城国府移転の後も同様のことが言えるものと考えられる。

江戸時代には恵解山古墳の東側が水田開発による削平を受けていることが判明した。これまでの調査では前方部の東西で江戸時代の土葬墓群や火葬骨が検出されていることから、墓地としての改変が指摘されていたが、水田耕作による改変もあることが明らかとなった。

最後に９-１調査区で明らかとなった大規模な整地があげられる。これは後円部の北側を水平に削平した後に高さ約１～1.5mの高さに堅く盛土を行っていて、更に断面観察から南側にある一段高い墓地の平坦面の北側崖面も同時期の盛土によって構築されていることが判明した。これは墓地や開墾に伴う造成としてはあまりに規模が大きく別の用途が考えられる。ただ先述したように、盛土内からは削平された埴輪片以外の遺物がまったく出土しないため、削平・盛土された時期は現在の所不明であり、その目的・用途などを含めて今後の課題である。

調査書抄録

ふりがな	いげのやまこふんだいきゅうじちょうさがいほう
書名	恵解山古墳第９次調査概報
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第54冊
編著者名	木村泰彦
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０－１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
恵解山古墳（いげのやまこふんだい）	長岡京市（ながおかきょうし）	26209	200	34°54′39″	135°42′2″	20081201～20090331	277㎡	保存整備
長岡京跡（ながおかきょうあと）	勝竜寺（しょうりゅうじ）1206-1		107					
南栗ヶ塚遺跡（みなみくりがつかいせき）	他		103					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵解山古墳（第９次）	古墳	古墳時代	後円部第１段埴輪列と東側造り出し、葺石および周壕東・南外周。	円筒埴輪、形象埴輪、結晶片岩	後円部第１段埴輪列、東側造り出し、周壕東・南側外周を検出
		江戸時代	水田、井戸、水溜	陶磁器、土師器、銅銭	
長岡京跡（右京第959次）	都城	長岡京期		土師器、須恵器、平瓦	
南栗ヶ塚遺跡	集落	平安時代		土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、青磁、白磁	
		鎌倉時代			

恵解山古墳第９次調査概報
長岡京市文化財調査報告書　第54冊

平成21（2009）年３月27日　印刷
平成21（2009）年３月31日　発行

編　集　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622(代)　FAX　075－951－0427

発　行　長岡京市教育委員会
〒617－0851　京都府長岡京市開田一丁目１-1
電話　075－951－2121(代)　FAX　075－951－8400

印　刷　ヨシダ印刷株式会社
〒604－8277　京都市中京区西洞院通り御池下ル
三坊西洞院町572NOA高松殿６Ｆビル
電話　075－252－5421(代)　FAX　075－252－5423